

Title	ジャック・ エリュール著(コンラッド・ ケレン訳)『政治的イリュージョン』
Sub Title	J. Ellul, The Political Illusion.
Author	奈良, 和重(Nara, Kazushige)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1968
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.41, No.4 (1968. 4) ,p.123- 127
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19680415-0123

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Jacques Ellul,

The Political Illusion

Translated by Konrad Kellen, New York, Alfred

A. Knopf, 1967, xxi+258+x pp.

シアック・エリユール著(コンラッド・ケレン訳)

『政治的イリュージョン』

一般市民はもとより、学者、知識人にしても現実の政治あるいは国家権力について本当になにを知り、また政治に参加し影響をおよぼそうとしているのだろうか。われわれは信じられない程に、みずからの蒙昧さを、エリユールのいう「政治的イリュージョン」を告白せねばならないかもしれない。ある箇所で指摘されているように(一六五頁)、われわれの政治へのコミットメントは *Credo quia absurdum* の水準でなされていると言われても、徒空にこれを否定することができようか。著者は先ずこう述べる。「曰く、政治とデモクラシーに関する科学的、論争的、訓政的、哲学的な諸研究があらわれつつある。これらの研究のごとくが——とりわけ私自身のものでも——人間のこうした活動、政治とデモクラシーに対するわれわれの愛着と、われわれに徘徊する恐怖とを証明しているの

紹介と批評

ある。なぜなら、これらのものからは言葉のほかは何も残らないということ、われわれは心の底でよく承知しているからだ」(六一七頁)と。シニカルな言い方だが、その通りであろう。本書は、エリユールの言葉にしたがえば、科学的でも哲学的でもなく、あまり真剣になられては迷惑であるというが、しかし真実を語っているものと思う。現代における政治的状況を「本書の序論「政治化 (politization)」によつて把握してみよう。エリユールのいう政治化現象とは、一切の問題が政治的なものになつたことである。あるいは国家そのものの成長拡大の現象である。このことは、国家がわれわれの生活の中心となつたという事実だけではなく、われわれ自身が国家の完全性というイメージを自発的に受容していることを意味する。今日、国家とはたんなる上部構造ではなく——無制約的な経済力が自由主義的国家を貶しめていた十九世紀にはマルクスの分析は妥当であつたらう——、実際われわれは、歴史というものが究極的には国家の機能によるものだという見解を抱いてさえいる。政治的決定にすべてが依存し、政治への情熱は、イデオロギーの如何を問わず、現代的人間の政治化への不可避性を顕著なものにしている。

そのさまざまな側面はどのようにあらわれているか。第一章「必然的なもの」と一時的なもの」は、現代国家における政治的決定機能を考察することにより、これを例証してみせる。要するに、政治的決定はもはや政治的原理や思想に基づいて行われているのではなく、政治もしくは政治家は、特殊専門的な技術の領域に移行しているのが現状である。「政治が依然として可能性の技術と定義される

にせよ、今日、何が可能であるかということ、いよいよ權威を以て決定するものは、ほかならぬ技術者である」(二三八頁)。テクノロジ化(technologization)のイデオロギーは、イデオロギーをテクノロジに從屬せしめてゆく。スターリンの政策決定を想起せよ。他方でわれわれは、政治的決定というものがつねに一時的であることを知る。それが技術的であればあるほど、變動的かつ断絶的であり、そうした性質が政治的世界に幻覺をあたえるのである。

ところで、政治が如何なる価値からも独立して作用するメカニズムとなつたとすれば、そのなかでの個人、あるいは市民の精神的自律性があり得るのだろうか。現代国家は、テクノロジカルな教育と訓練とを市民的徳性として要求している。したがつて、たとえ個人が政治に参加しうるにしても、政治の自律化に埋没させられざるを得ない(第二章「政治の自律性」)。このことは、情報—プロバガンダと世論形成の関連をみればいつそう明瞭となる(第三章「イメージの世界の政治」)。すなわち、われわれは政治問題がそれ自体で存在し、情報がその問題を世論に提示するかのよう^にに思考しがちである。だが実際には、国家がマス・メディアを媒介として事実なるものを伝播し、プロバガンダがその周辺に世論を形成してゆくのだ。そして世論の情緒的反應をプロバガンダは利用しつつ、政治問題を創造するわけである。世論はその問題をめぐつて結集し、問題の解決を要求するようになる。こうして、われわれは政治のイメージの世界に生きている。以上のような政治・技術の本質は、ある価値判断をともしなつたものではけつてなく、共產主義、ナチズムを

はじめ、現代のデモクラシーにもつとも特徴的に見出されるものである。

では、かかる国家権力をどのようにしてコントロールできるのか。以下、第四章「国家のコントロール」、第五章「直接参加」、第六章「政治的解決」はいずれもその試みであるが、結論的には、すべて政治的イリュージョンにすぎない。第一に、市民が政治権力をコントロールできるといふ觀念、それはかつてデモクラシーが議會や代表制に賦与していたものであつて、現在ではまつたく廢れた、致命的な危険性である。現代国家はまさに官僚と行政の巨大な、複雑多岐な装置に依拠しているからである。「官僚機構が巨大化すれば、それについての有効な知識、あるいはそれを支配する——實際にそれを指導する——有効な力をもつことはそれだけ不可能となる。彼がわずかの人事異動を行つたところで、それは現実に何もかも変えないのである。……行政上の構造のもつ鍾はあまりに重い」(一五三頁)。官僚制の全能性をまねにして、市民は無力であり、その浸透しがたき神秘性にとらわれてしまふ。カフカの『城』と『裁判』は、国家ではなく官僚制に関するものであつたことをわれわれは忘れてはならない。ともかく、《民主的コントロール》は官僚国家に対して役立たない。

第二の政治的イリュージョンは、市民として個人が直接政治に参加する場合である。かかる自己主張あるいは態度が、すでに述べた政治の現実に対して無能なものであり、不条理への非合理的な飛躍にほかならないことは言を俟たない。生活水準が上昇し、政府の統

治形態がより自由になれば、市民の政治参加がしだいに多くなり、彼が政治的に成熟するようになるであろう。だが注意すべきことは、国家の政治的機能が増大し組織化され、経済が計画化されるにいたれば、むしろ逆に、政治的に成熟した市民のラディカルな意見の不一致を排除するようになることである。それは別の政治的成熟、すなわち国家への参加と忠誠心とを証明するよう求めるからだ。現代国家というものは個人の強力な自律性の生存を許容することはできないのである。

しかし、党派、組合、運動など、中間項によつて市民が政治に有効に参加することはできるか。「ある党委員会の活動に参加したり、または集会に出席しているから政治生活に参加していると思つている市民は、もつとも憐むべきイリュージョンに屈服している。彼は党活動と真の政治的事件への参加とを混同している」(一六八—一六九頁)。著者はサルトル流の政治的コミットメントを痛烈に非難する。実存主義者と現象学者は現実忘却の奇妙な行動に終始している。人間における真実なるものに關係づけ、真実なるものにみずからをコミットしようとする精神的な爪先旋回は、擬似現実の人為的創造によつて現実を逃れようとする方法以外のなものでもないからだ。ある党派なり集団に所属することによつて得られる特権に甘えて、政治の真の問題から逃れ去ることこそ偽りのコミットメントである。さらにわれわれは、政党であれ組合であれ、組織というものに随伴する官僚化、寡頭化の傾向を熟知しているはずである。そして組織指導者たちが、自分の権力維持ばかりを顧慮するという

傾向を明白に認めるであろう。

すべての問題は政治的なものである、それ故に政治的に解決可能である。政治的イリュージョンの第三の側面とはこれである。ここでエリユールは、フォイエルバツハのいう人間の宗教的疎外との類比を用いているのは興味深い。つまり、今日人びとは自分が実現不可能なものを政治へと投射し、政治にみずからを犠牲にしようとする。これは政治化された人間の奇態な、空疎な慰めごとだ。内面的葛藤を政治のトータルな責任と代置することによつて、あたかも個人的責任を回避しているかの如く振舞う。政治は、宗教と異なつて、善とか悪、人生の意味、正義とか自由の責任といったパーソナルな問題を取り扱い、絶對的に解決することなどできない。そもそも政治とは《解決》ではない。なぜなら、数学的問題には解決がなければならぬが、政治的問題は、所与の事実が矛盾している場合、つまり解決不可能な場合にのみ生ずるからである。「政治的問題は和解のみ認めるが、解決ではけつしてない。……にもかかわらず、現代の人間はますます解決を要求する。ますます技術者たちは、社会の問題が正確な解決を認める正確な問題であるかのように、それらを定式化することを強調する。《解決》のつりゆく神話は、われわれの良心から、すべての真の政治的努力の相対的な、つまり限定的な性質を漸次とり除いてゆく」(一九〇頁)。

正義、自由、真理の諸価値——これらは今日国家のプロパガンダとして使用されるとき、物質的財の平等な分配による幸福、物質的な生活水準の上昇と余暇、事実と一致する正確さ、というものと同

じであるが——を実現することを国家に期待するのはよいが、そのことは政治権力をコントロールするという目的とまつたく逆方向にはたらくことを見間違えてはならない。個人が政治化されればされるほど、彼は一切の問題を政治的問題とみなし、政治行動に重要性を付することになる。同時に彼は、国家にますます志向して、より以上の権力を国家にあたえるようになる。かくして、政治の呪縛のもとにある個人は、すべてを政治化しつつ、国家をコントロールするどころか、かえつて国家権力の領域が不断に拡大化することをノーマルであると考えざるを得ない。

とすれば、《解決》への方途はどこにあるのか(第七章「脱政治化(Depolitization)と緊張」)。脱政治化あるいは没政治主義(Apolitism)とは、エリユールによれば、私生活への逃行であり、懶怠か怯懦による諦観の態度にすぎない。それはすべてが政治だということを拒絶するだけで、政治的イリュージョン同様に不条理なことだ。それ故に、われわれの目的がかかるイリュージョンからの脱出であるとすれば、他の視角から問題状況を見直さねばならない。「政治とは生の、猶予なき生の問題だ。一七九八年における根本的な過誤は、国家に対するコントロールが国家に見出され得る、そして後者は自己規制的メカニズムたり得る、と信じたことであつた。国家は乗り越えがたき障壁に出会う場合にもみ退くということ、経験は明らかにしている。この障壁はただ人間たるのみ、国家から独立して組織された市民たるのみである。だがひと度組織されるなら、市民は脱政治化しかつて再政治化(Repolitization)するため、真にデモクラ

シー的態度を所有しなければならぬ。この態度こそ、彼がイリュージョンから解放される帰結たり得るのである」(二〇二頁)と、強調される。

そのためには先ず、政治を適切なパースペクティヴに置くよう努力することに於いて、政治を神話から解放し、政治を非ドラマ化すること、これと関連して、市民がさまざまな正統性理論やプロパガンダの玩弄物とならぬようにすることである。むしろわれわれにとつては、真正な緊張関係を国家のなかにつくり出すことが必要である。エリユールは、アメリカで盛んに行われているような人間の心理学的な社会への適応とか、人間関係のテクニクの愚劣さを鋭くつく。政治生活においても個人生活においても、環境に適応せよとすることは政治のエントロピーを増大させ、生を減少させることにより、政治的イリュージョンの決定的役割を果させることにはかならない。われわれの目指すのは機械化された完全な単一社会といったものではなく、緊張を内包したヴァイタルなそれである。「デモクラシーとは断え間なき征服によつてみずからを拡大する。それはノーマルな、ナチュラルな、自然発生の体制ではない」(二一七頁)。

したがつて、国家からまつたく独立した、また国家に对立するような集団——政治的、経済的、芸術的、学術的、宗教的等の集合体——を確立することが根本問題である。それらは国家の否定ではなく、国家以外の何ものかであり、いわば新しいアンガジュマンを可能ならしめるものである。

しかしながら、これらは制度の問題でないことは言うまでもな

い。今日の問題は、政治がまさに人間を破壊し去り、しかも人間なくしては何ごともなし得ないということである。最後の第八章「人間とデモクラシー」は人間の復権に言及される。政治・テクノロジーのセッティングにおいて、現代デモクラシーは進歩してきたし、今後も進歩しつづけるであろうが、それとともに権威主義的傾向への危険性をまぬがれない。もしもそうであれば、この新しい政治的疎外をどう克服できるか。「今日、人間的デモクラシーを創作すること、それと調和のとれたような類いの人間を願望し、またそういう人間を選択することはよりいっそう困難である」(二三三頁)。だが、人間は真に人間でなければならぬ。エリユールは、人間が可能なものであることを信ずる。その「デモクラシー的人間」とは如何なるものか。この問題について著者はつぎの作品で探究することである。ここでは、合理的——合理主義的ではない——人間と尊敬ということに触れるにとどまつている。尊敬とは、少数意見の評価および意見の対話ディアルグという二つの態度方向を示唆している。

いずれにせよ、われわれは知識人の政治的コミットメントや政治化された政治的行動とは違ったレビューで思考し、行動する必要があるが、そのために第一に取り組まねばならぬ課題のひとつは、当然のことであるけれども、現在ステレオタイプ化した概念や前提を問い返すことである。

「これらの常套句とは、われわれの社会の現実の発展によつて知らぬ間にわれわれの意識に忍びこんだ、その社会を正当化すべく目論まれた、そしてそれによつてわれわれが余り多くの苦惱もなく社会

に適應してしまふような、基本的なイデオロギー的麻醉薬である。これらのステレオタイプは、その上にわれわれが自分の壮麗なイデオロギーや教義さえも樹立しようとする無意識的な土台をあたえている。それらは、人間は幸福のためにつくられているとか、人間は善性であるとか、すべてのものは物質であるとか、歴史はある方向をもち、容赦なくそれに従つているとか、テクノロジーは中性であつて人間の支配のもとに置かれるとか、道徳的進歩は物質的進歩に必然的に従うとか、民族は価値があるとか、もはや言葉ではなく行為だとか、労働は徳であるとか、生活水準の上昇はそれ自体善であるとか、等々、われわれの判断と意識の無数の側面にわたるものであるが、われわれが真実の社会的イメージをみることができるためには、それらは踏みにじられ、曝露されねばならない。このレビューで問題を攻撃することはたんに知的遊戯ではなく、陰險な批判でもなく、また自己の良心を検討するためのひねくれた探索でもない。むしろわれわれは、まさにこれらの信念がわれわれを把え、信服させ、行動に駆り立てようとするプロパガンダへの途を開いてしまうのだということを認めるようにならねばならない。われわれのうちこれらのステレオタイプが存在すること、それこそがわれわれの存在の社会的弱点であり、われわれが傷つき易い中心点である」(二三九頁)。

(奈良 和重)